

的な特徴が色濃く残るのは民法、特に私的領域を規定する家族法の分野である。イスラーム法でも同様で、家族法に関わる法規定には現在でもイスラーム法の影響が残っている。本書で特に「子ども」という観点に焦点を絞ってから父と子の関係、母と子の関係など家族に関わるイスラーム法を考察することは、イスラーム法そのものの研究にとっても画期的で、イスラーム法をわかりやすく伝えることができる点でとても有効な方法となっている。

4. 総評

本書は「子ども観」をキーワードにしているため、イスラームを専門としない読者にとっても、また、法学を専門としない読者にとっても比較的手に取りやすく、専門用語などについてもわかりやすく解説してあるなど、たいへん注意深く、細かな気配りが隅々まで行き届いているため、専門の研究者だけではない、幅広い分野の読者に訴えかけることができるようになっている。読者たちは、イスラーム法における子どものとらえ方、父母との関係を知ることで、これまでのステレオタイプのイメージとは異なるイスラーム理解が可能になるだろう。

他方、イスラーム家族法の研究者にとっても本書は待望の研究書である。古典イスラーム法は死に絶えた歴史上にしか現れない法ではない。近代化に伴い、イスラーム諸国では各国の法が西洋近代法を範として新たな法編纂が進められてきたが、その過程ですべてのイスラーム法規定が否定されたわけではないからだ。先にも述べたように家族の問題など私的領域を規定する家族法の部分に関しては、特にイスラーム法特有の法規定や法の精神が現在でも残っている。そのため、イスラーム諸国各国の現代法について検討する過程では、その都度古典イスラーム法での法規定のあり方を参照し、その法規定がどのような過程で現行法になったのかを考える必要がある。本書は、膨大なイスラーム法の法学書の中でも特に「子ども」の法規定を抽出することでイスラーム法における家族像を浮き彫りにしてくれており、イスラーム家族法研究者にとってはたいへんありがたく、今後何度も参照することになると思われる意義のある研究書である。

さらに、本書の重要な特徴として、本書が法学者間の見解の相違に目配りをすることで、多様な社会的背景からイスラーム法の解釈が生まれていること、社会の変化によるイスラーム法が多様に展開していることがわかるという点がある。ここから、これまで家父長的で父親に絶対的な権力が与えられ、女性に対して不利な規定ばかりがあるというイスラーム法のイメージには再考が必要で、生まれた子の保護と養育という点も含めて考えるべきであるとしている主張は重要な指摘である。ただし、本書でも言われているように、法学書に書かれていることが、現実の社会の中でどのように運用されていたのかについての情報を得ることはたいへん難しい。例えば、乳母についての記述が法学書に多く書かれているからと言って、実際の乳母の制度が社会の中で発達していたのかどうか、法学書のみをみただけでは確定的なことが言えないという(151頁)。特に歴史研究では個々の女性の生活史の資料が極端に少ないため、法学書における子育ての規定がどれくらい現実社会に浸透していたのかなど、今後の歴史研究などによる検証が待たれる。

(森田 豊子 鹿児島大学グローバルセンター特任准教授)

白杵陽『日本人にとってエルサレムとは何か——聖地巡礼の近現代史』(叢書・知を究める 16) ミネルヴァ書房 2019年 viii+392+12頁、白杵陽『「ユダヤ」の世界史——一神教の誕生から民族国家の建設まで』作品社 2020年 406+xiv頁

白杵陽教授(日本女子大学)は、パレスチナ／イスラエル研究を中心に、これまで10冊以上の単著を上梓してきた。中東・イスラーム研究に携わる者のなかで、白杵氏の名前を知らない人はいないだろう。その一方で、評者は白杵氏を「パレスチナ／イスラエル研究者」あるいは「中東・イスラーム研究者」と呼ぶことに若干のためらいも感じている。それは、白杵氏の業績が「地域の専門家」に留まらないグローバルな視座と歴史的な深みを備えているからである。白杵氏が展開する議論は、様々な現象の共時的な連関を射程におさめるとともに、現代の事象を扱うなかでも歴史的な文脈を強く意識している点に大きな特徴がある。本稿が

取り上げる新著二冊も、臼杵氏の幅広い研究視野が存分に活かされた好著である。

1. 『日本人にとってエルサレムとは何か——聖地巡礼の近現代史』(ミネルヴァ書房、2019年)

本書は、ミネルヴァ書房が刊行する『ミネルヴァ通信「究」』での連載「中東の語り部たち」(2014年～18年)を書籍としてまとめたものである。連載をベースとしていることもあり、各章の随所で著者の現地体験談などが記されている。本書の内容は必ずしも平易ではないが、著者の挿話が小気味よい「スパイス」となっており、読者の心を逃さない。著者の個人的な回想は、評者のような後進の研究者にとってみれば、在りし日の中東をうかがい知る貴重な資料でもある。

*

著者は序章において、本書の趣旨を端的に説明している。本書は、明治期末から昭和期までを中心に、日本人のパレスチナ訪問記や評論を取り上げ、そこに著者自身の経験にまつわる記述を織り込んだものである。それによって、「聖地エルサレムとは何か、あるいはもっと広く日本人にとってパレスチナとは何なのかを歴史的に考えてみる素材」(pp.1-2)を提供することが目指されている。序章の後半で、著者は自身の研究遍歴を振り返り、重要な契機の一つとして1984年のイスラエル・アラブ社会への訪問について述懐している。イスラエル北部の風景や気候、食に関する生き生きとした叙述は、現地を訪れたことのない読者を引き込む格好の導入となっている。

第1章では、20世紀初頭に二度パレスチナを訪れた小説家・徳富蘆花を取り上げている。蘆花は、欧米的なプロテスタントの視点からエルサレム旧市街のユダヤ地区やムスリム地区の不潔さをしきりに強調したとされる。また彼はハイファでバハーイー教に触れ、万教帰一や平和の希求といった理念に賛同したものの、バハーイー教の指導者にはキリスト教にあるような「苦しみ」が欠けていると批判した。そして日本こそが理想的な世界の実現を主導する立場にあると主張した。著者はこうした蘆花の立場に「キリスト教的日本主義者」としての相貌を垣間見ている。

第2章では、無教会派キリスト教徒として内村鑑三、矢内原忠雄、黒崎幸吉を取り上げている。彼らは、キリスト教シオニズムの発想から、キリスト再臨の前提としてパレスチナにおけるユダヤ人の復興に期待を寄せた。そして、後者二人は実際にパレスチナを訪問し、シオニズム運動の非資本主義的な方向性や緑化の活動、「文明的な」近代社会の創設にいそむ姿を高く評価したとされる。

第3章では、日本の国家主義者・アジア主義者として大川周明や満川亀太郎が取り上げられ、シオニズムやユダヤ人に対する彼らの認識が明らかにされている。両者はともに、欧米列強に対抗するアジアの民族解放の一翼としてシオニズム運動を評価していた。特に大川はパレスチナにおける農業や産業の状況も分析し、ユダヤ人による入植活動に対して楽観的な展望を示していたことが指摘されている。

第4章では、日本軍の「猶太問題専門家」と呼ばれた軍人として、安江仙弘と四王天延孝を取り上げている。彼らに共通していたのは、ユダヤ人を世界の「隠然たる大勢力」として捉え、反ユダヤ主義的な陰謀論を展開したことである。四王天の場合は、反ユダヤ主義の発想を根強く持っていたが、安江は、パレスチナのキブツを訪ねたことで、ユダヤ人全体を危険視するのではなく、民族復興を志すシオニストに好意的な眼差しを向けるようになったと言われる。

第5章では、イスラーム研究者の小林元と英文学者の中野好夫を取り上げ、「アラビアのロレンス」への理解のあり方を分析している。小林は、ロレンスが、帝国の利益を保守するイギリスの「旧体制」に対して、「新体制」を希求する若者として熱意に満ちていたと評価している。中野は、日本国内でも流布していたロレンスの英雄的な神話化・伝説化を問題視し、現実のロレンスのありようを冷静に分析する必要性を強調していた。

第6章では、戦後のキリスト教作家として遠藤周作と加賀乙彦を取り上げ、彼らのエルサレム像を明らかにしている。両者はいずれも聖書の物語とイエスの足跡に関係づけられた心象風景的なエルサレムを念頭に置いていた。実際にパレスチナを訪問した遠藤は、アラブ人キリスト教徒の存在を等閑視したほか、現実のエルサレム旧市街には「不潔」という印象を抱くのみであった。また加賀も、ベト口岐部(日本人として初めてエルサレムを訪れたと言われるキリスト教徒)を題材とする小説のなかで、イエスを追い求める自身の想いを岐部の巡礼に投影し、パレスチナの地を描いている。

終章では、明治から昭和を生きた日本人ムスリムである山岡光太郎のエルサレム訪問記を取り上げている。著者は、山岡の著作における聖域の説明が基本的な用語のレベルで問題を含んでいると指摘しつつ、当該書はヨーロッパの観光ガイドブックを基にした事実上の翻訳であると述べる。そして、イスラーム的なエルサレム理解の不足は山岡個人の課題というよりも、当時の日本人ムスリムとしての限界を示していたと評している。

著者は最後に「本書は私なりのエルサレム論であり、これまで多くの日本人の知識人が見てきたエルサレム像を通して私自身の『エルサレム像』を描いたものである」(p. 382)と述べる。その上で、現下の紛争のなかで変貌を続けるエルサレムに関しては、著者よりも若い世代が描写してくれることだろうと期待を記して本書を締めくくっている。

*

本書の特色は、第一に、日本国内でそれなりに名の知られた著述家、軍人、政治家、小説家について、パレスチナやエルサレムとの繋がりから新たな像を浮かび上がらせている点であろう。本書に登場する人物の多くは、これまでもいろいろな形で取り上げられ研究されてきたが、彼らに中東・イスラーム研究の立場から光を当てている点で本書は異彩を放っていると言える。本書を通じて、読者は日本の帝国意識の芽生えや20世紀初頭の時代精神などに関して理解を深めることができるだろう。著者は、[白杵 2010]においても、日本近現代史や思想史と中東・イスラーム研究に跨がる形で大川周明のイスラーム理解を分析し、高い評価を得ている。本書も、異なる研究分野を架橋する著者の知見が発揮された一冊であると言える。

第二に、本書は近現代の日本人がエルサレムに投影した像を明らかにする希有な研究として意義を持っている。エルサレムの歴史に関する研究のなかでは、18世紀・19世紀頃から欧米のキリスト教徒がエルサレムやパレスチナに強い憧憬の念を抱いてきたことが指摘されている。当時の人びとが残した旅行記や写真などを資料とする研究では、オリエンタリズム的な世界観においてパレスチナがしばしば荒野のイメージで表象されたことや、彼らの記録のなかで現地のアラブ人による生き生きとした都市生活の情景が捨象されていたことなどが明らかにされている [cf. Pullan and Sternberg 2012]。本書は、欧米諸語の研究で取り上げられることのない「極東」のエルサレム観を描写しており、聖都エルサレムのイメージ付けをめぐる、地域をまたいだ比較研究の端緒となる可能性を秘めている。

これらの意義を踏まえた上で一点だけ苦言を呈するとすれば、本書は各章での内容上のまとまりが弱く、それぞれの節が一つの主張に収斂していくわけではないため、若干読み通しづらい箇所があることである。これは『ミネルヴァ通信「究」』の連載を各章の節として構成していることから生じる問題であろう。

例えば、第3章では、大川周明のシオニズム理解を扱った後に、彼のイスラーム研究の業績と「アジア」という言葉遣いを取り上げる節が続いている。内容そのものは非常に興味深い、その節の後には満川亀太郎に話が移っていくため、大川のイスラーム論とアジア論の箇所に関しては唐突な印象が否めない。また、第5章では小林元と中野好夫の「アラビアのロレンス」論が検討された上で、中野による徳富蘆花の評伝が取り上げられる。中野の著作物であるとはいえ、その内容は蘆花が旅をした20世紀初頭のエルサレムを舞台としているため、読者は第5章のそれまでの記述から時代と場所を切り替える必要に迫られる(そもそも第5章はパレスチナの話題をほとんど扱っておらず、章自体も浮いた存在となっている)。このような書籍としての可読性の問題については、連載から編集される過程で何らかの工夫が施されても良かったのではないだろうか。

2. 『ユダヤ』の世界史——一神教の誕生から民族国家の建設まで』(作品社、2020年)

本書は「ユダヤ人の歴史を世界史の流れの中で叙述したもの」であり、「私[白杵氏]なりの立場からのユダヤ人あるいはユダヤ教徒の世界史である」(p. 17)とされている。

2018年に出版された『「中東」の世界史』[白杵 2018]の姉妹編である本書は『「ユダヤ」の世界史』と題されている。まず、「世界史」という面について言えば、本書は、グローバルな文脈でユダヤ人あるいはユダヤ教を位置づけていることが特徴である。「まえがき」の前に付された「本書の舞台となる主な国々」の地図を見ると、対象地域はサブサハラのアフリカやオセアニアを除く全世界に広がっている。次に「ユダヤ」については、題名のなかで括弧が付されていることから分かるように、その呼称をめぐる日本語特有の問題

が意識されている。著者は、「ユダヤ人／教徒」という表記が妥当であると考えているが、本書のなかでは、近代を境に、信徒集団としてのユダヤ教徒と民族集団としてのユダヤ人を使い分けている箇所もある。

序章と終章を合わせて21章に及ぶ本書では、古代のユダヤ教の形成期から中世・近世、近代、現代に至るまでの世界史が叙述されている。その点では幅広いトピックをおさえた「便利な一冊」という印象を与えるかもしれないが、本書の意義はそれにとどまらない。ユダヤ人／教徒の世界史を語るなかで、イスラームとの関わりや中東におけるユダヤ共同体の境遇に多くの紙幅を割いている点は本書の大きな特色である。

*

第1章では、ユダヤの「統一性」と「多様性」という軸を中心に本書の趣旨と意義を説明している。まず著者は、ユダヤの歴史を描く際に「離散／定住」の評価をめぐる論争があることを指摘する。シオニストの場合には明確に「離散の否定」が強調されているが、ユダヤ人／教徒のあいだではディアスポラの居住地を「故郷」として捉える向きもあると述べている。次に、著者は「ユダヤ人」の定義を取り上げ、系譜的な考え方や信仰による規定などがあることを確認する。日本語の大辞典における「ユダヤ人」の定義に様々な揺らぎがあることを示した上で、「研究者、ナショナリスト、あるいは国家によるユダヤ人についての議論になれば、非常に多様になることは明白だろう」(p.33)と指摘している。最後に、著者は「ユダヤ人の歴史」を描く類書が前提とする歴史観を比較検討する。その上で、ユダヤ人／教徒を一つにまとめる要素とその内的な複数性を両方意識した視点が重要であると主張している。

第I部「古代——『民族／教徒』の誕生」では、主に『一神教の誕生——ユダヤ教からキリスト教へ』[加藤2002]に依拠して、ユダヤ教の形成過程や聖書の位置づけなどを説明している。

第2章では、出エジプトや、イスラエル王国の成立・崩壊、バビロン捕囚などといった初期のユダヤ史を取り上げている¹⁾。その後、第3章では、聖書の構成や成り立ち、律法の意義を解説している。そして第4章では、紀元前2世紀から1世紀にかけてユダヤ教徒たちのあいだで様々な派閥が生まれたことを説明し、そのなかで律法を軸としたラビ・ユダヤ教が主流化していったことを確認している。総じて、第I部ではユダヤ人／教徒について論じる上で必要不可欠な前提が簡潔にまとめられている。

第II部「中世・近世——国際的ネットワークの展開」では、イスラーム帝国支配下のユダヤ教徒の境遇や、十字軍遠征、レコンキスタとユダヤ教徒の関わりなどを取り上げている。

第5章では、イスラームとユダヤ教、キリスト教の関係性や、ムハンマド時代のユダヤ系部族などについて触れた上で、イスラーム王朝でズィンミー(庇護民)として暮らしたユダヤ教徒が、幅広い商業・交易ネットワークを作っていたことを説明している。

第6章では、しばしばイスラームとヨーロッパの衝突として捉えられがちな十字軍遠征やレコンキスタにおいて、ユダヤ教徒も虐殺や迫害の憂き目に遭ってきたことが指摘されている。

第7章では、オスマン帝国の事例を扱い、再びイスラーム世界のユダヤ教徒に光を当てている。オスマン帝国のユダヤ教徒たちは商業活動や宗教活動を自由に展開していったが、帝国の衰退期にさしかかると、ユダヤ教徒への差別的な扱いなども受けるようになったと言う。注目すべき点として、著者は第5章に続き本章でも、イスラームの支配がユダヤ教徒に寛容であったかどうかという論点について慎重な記述を行っており、過度な単純化を避けている。

第III部「近代——内と外からの改革」は、イスラーム世界とヨーロッパ諸国を対象として、近代世界においてユダヤ人／教徒のあいだで様々な思想と運動が生まれたことを明らかにしている。

第8章では、今日でもイスラエルに熱烈な支持を寄せるキリスト教福音派の起源であるピューリタン運動について説明した後、市民革命を経たイギリスやフランスにおけるユダヤ人解放とユダヤ教理解の変化を明らかにしている。

第9章は、ヨーロッパの啓蒙主義によるユダヤ教への影響を論じている。とりわけ、ハスカラーとも呼ばれるユダヤ啓蒙主義が、現在もアメリカに残るユダヤ教改革派の原型を形成したことや、19世紀以降のシオニズム運動の淵源にもなったことに言及している。

第10章では、ユダヤ教の超正統派と呼ばれる人びとを取り上げ、なかでもハシディズムの考え方につい

1) 瑣末な点ではあるが、第2章1節の副題にある「イスラエル旧市街と神殿崩壊」は「エルサレム旧市街と神殿崩壊」の誤記であろう。

て説明している。ハシディズムが、18世紀から19世紀のヨーロッパにおけるロマン主義と共通性を持っていたことや、資本主義的な社会への転換における新たな救済として位置づけられていたことなどを指摘している。

第11章では、オスマン帝国の衰退期におけるユダヤ教徒の境遇を取り上げている。ここでは、オスマン帝国の近代化政策であるタンジマートの展開や、1839年～40年にダマスカスで起こったユダヤ人迫害である「血の中傷」事件に触れ、それらの事例からヨーロッパ諸国によるオスマン帝国への干渉のありようを描いている。

第12章では、「血の中傷」事件を一つの契機としてパリで設立された万国イスラエル同盟(アリアンス)について取り上げている。著者は、アリアンスが非ヨーロッパ世界のユダヤ教徒を主な対象として、フランス的な啓蒙主義と「文明化」の使命に基づきながら非シオニストの立場にあったことを強調する。そして、このアリアンスに注目することが、イスラエルにおいて優勢なシオニズム史観を相対化する上で重要な意味を持つと主張している。

第IV部「現代シオニズムと反ユダヤ主義」では、シオニズム運動の形成からイスラエル建国に至る現代史を扱っている。

第13章は、テオドル・ヘルツルが唱えた政治的シオニズムを中心に、宗教シオニズムや、精神シオニズム(文化シオニズム)などの諸潮流を紹介している。今日では「ユダヤ国家の父」として評価されるヘルツルであるが、彼がパレスチナでの建国にこだわらない姿勢を示したことで、他のシオニストから激しい反発を受けたことなどが明らかにされている。

第14章では、イエメン系ユダヤ人に光を当てながら、ヨーロッパ起源のシオニズムにおける啓蒙主義的な側面を指摘している。「遅れたもの」として捉えられてきた非ヨーロッパ出身のユダヤ人たちは、イスラエルの公的な歴史記述のなかで傍流に追いやられてきたが、1980年代以降にイスラエル国内でも再評価が進みつつあるとされる。

第15章は、ユダヤ人が人口の半数以上を占めたギリシアの港町サロニカ(現在のテッサロニキ)の盛衰を軸に、第一次世界大戦前後のオスマン帝国におけるユダヤ人の状況について論じている。バルカン戦争を経てサロニカがギリシア支配に組み込まれ、その後、ナチス・ドイツによってそのユダヤ共同体が壊滅させられるまでの展開を説明している。

第16章は、他の章よりもやや多くの紙幅を割いて、第一次世界大戦から1940年代頃までのシオニズム運動とイギリス政府の役割について議論している。とりわけ著者が強調するのは、1939年のパレスチナ白書(マクドナルド白書)の発表である。この白書でイギリス政府はバルフォア宣言(1917年)をそのままに履行する方針を撤回した。バルフォア宣言からイギリス委任統治(1920年～48年)の流れは、イスラエル建国への連続したプロセスとして説明されることもあるが、著者はこのような過度に簡素化された理解ではイギリスによるパレスチナ外交の重要な転換を捉えきれないと指摘している。

第17章では、「バビロンのユダヤ人」と呼ばれ、長い歴史を持っていたイラクのユダヤ共同体を取り上げている。特に、非シオニストが多くを占めたイラクのユダヤ人が、第二次世界大戦後の政情不安のなかでイスラエルへの移民を余儀なくされるまでの展開を追っている。

第18章では、19世紀から20世紀のアメリカにおけるユダヤ社会を取り上げている。在米ユダヤ人のなかでドイツ系の旧移民と東欧・ロシア系の新移民のあいだに軋轢があったことや、アメリカのユダヤ団体が、迫害された同胞の救済とイスラエルへの移住援助に従事してきたことなどを明らかにしている。

第19章では、第二次世界大戦からイスラエル建国に至るまでのシオニズム運動の展開について論じている。第16章に続いて、著者はイギリスが果たした役割に光を当て、委任統治終結のあり方に注目する。1947年にイギリス政府はパレスチナにおける事態の收拾を国連に委ね、そこでの治安維持の職務を放棄した。その結果、パレスチナ分割決議案が出された同年11月から、シオニストによるアラブ住民への攻勢が激化しはじめており、1948年5月のイスラエル建国宣言とそれに続く中東戦争に先立って、すでに多くの避難民が発生していた。本章で著者はこの委任統治の終盤におけるイギリスと国際社会の無責任を厳しく追及している。

終章は、第一次中東戦争からアメリカのトランプ政権による中東政策までを扱っている。著者は本章のは

じめで「ディアスポラのユダヤ人／教徒の歴史は続いているが、シオニズムの目標はユダヤ人国家の建設で達成されたとの認識の下に、古代以来のユダヤ人／教徒の歴史叙述はとりあえずここで終わりにしたい」(p. 367)と述べている。本章の分量は扱われる期間の長さに対してそれほど多くないが、この文章に著者の意図が示されていると言えるだろう。

*

本書の第一の意義は、なによりも、ユダヤ人／教徒の信仰と歴史的な歩みを一冊にまとめたことであろう。改めて言うまでもなく、ユダヤの宗教や歴史に関わる研究書・啓蒙書は日本語でもかなり増えてきている。しかし、本書のように、古代から現代までを対象として、非ヨーロッパ世界も含んだ広い枠組みのなかでユダヤ人／教徒の歴史を叙述した著作はいまだ少ない。本書を通読することで、読者は統一性と多様性のなかで「ユダヤの世界史」を把握することができるだろう。また本書では、注釈において各トピックの代表的な研究が列挙されており、読者が自らの関心に沿って、さらに理解を深めていけるようになっている。この点で、本書は様々な面からユダヤ人／教徒に関心を持つ学部生や大学院生にとっての良質な「水先案内」としても価値が高い。

本書のもう一つの意義は、しばしば抜け落ちがちな中東・イスラーム世界のユダヤ人／教徒や非シオニストに関する記述が充実していることである。[臼杵 1998]以来、著者はヨーロッパ中心史観を批判的に再検討するユダヤ・イスラエル研究を続けてきた。本書でも著者は、「ユダヤ」の世界史を叙述するにあたり、その滑り出しとなる第5章で、ヨーロッパ地域ではなく、イスラーム世界のユダヤ教徒に注目して議論を立ち上げている。現在でも通俗的なレベルでは、ユダヤ人／教徒をヨーロッパ史の関わりで捉え、その延長でイスラエル国家を特徴付ける視点が支配的であると思われるが、イエメン系やイラク系の人びと、非シオニストのユダヤ団体に関する本書の記述はそのような一般的なイメージを覆す意義を持っている。

本書の課題を一つ挙げるとすれば、一冊の書籍のなかで広範な話題を扱っているがゆえに、若干説明の不足を感じる箇所が見られることである。例えば、第18章において、アメリカのユダヤ人とシオニズム運動の関係を取り上げているが、そこでは、ユダヤ人の民族的郷土の創設を旨とするバルフォア宣言を支持しつつ、非シオニストであるという立場も存在すると述べている(pp. 341–342)。著者によると、このようなある種の矛盾をはらむ発想が可能なのはアメリカ・ユダヤ社会の特徴であるとされるが、ここではそれ以上の説明がなされていないため、予備知識のない読者は消化不良を起こしてしまうだろう。もちろん、このような説明上の問題は、ユダヤ人／教徒の世界史を幅広く叙述するという本書の趣旨から考えれば致し方ないとも言える。

2015年1月にフランスで起こったユダヤ系食品店での銃撃事件をはじめ、欧米諸国ではユダヤ人を標的とした暴力事件が後を絶たない。今日においても反ユダヤ主義は欧米社会に巣くう根深い病理の一つである。また、中東政治・国際政治に目を向けると、イスラエルとアメリカの蜜月関係や、イスラエルとアラブ諸国の外交的な緊密化は「台風の目」として多方面に影響を与えている。日本では、ハイテク産業の先進国としてイスラエルに興味を抱く企業が増えており、同時に「ユダヤ人」への関心も高まりを見せている。依然として「ユダヤ」の存在感が大きい現代世界を見通す上で本書が必読書となることは間違いないだろう。

<参考文献>

- 臼杵陽 1998 『見えざるユダヤ人——イスラエルの「東洋」』平凡社。
—— 2010 『大川周明——イスラームと天皇のはざままで』青土社。
—— 2018 『「中東」の世界史——西洋の衝撃から紛争・テロの時代まで』作品社。
加藤隆 2002 『一神教の誕生——ユダヤ教からキリスト教へ』講談社。
Pullan, Wendy and Maximilian Sternberg. 2012. “The Making of Jerusalem’s ‘Holy Basin’,” *Planning Perspectives* 27(2), pp. 225–248.

(山本 健介 日本学術振興会特別研究員(PD))